

人文科学研究所 研究報告会

日時：平成29(2017)年7月1日(土) 10:00～

会場：大東文化会館 K-0301 ※聴講自由

◆ 所長挨拶

◆ 報告1 10:10～10:40

東松山キャンパスの史跡

「説話・伝説と東国地域社会史研究」研究班

報告者：磯貝 富士男

大東文化大学の敷地となっている東松山岩殿の字南新井地区近辺(岩殿観音の背後の尾根部分で、西から東側に向って傾斜している)の遺蹟・遺物としては、当面、「旗塚」・「判官塚」・「堀カネノ池」が注目される場所である。このうちの「旗塚」についての基本的事実は既に本研究会でも報告してきた。今回の報告では「判官塚」と「堀カネノ池」について、基本的史料を紹介するとともに、若干の考察をして、それら三遺蹟などから窺い知れるところの南新井近辺の土地がどのように利用されてきたかという側面からの大雑把な歴史的見通しを試みる。

◆ 報告2 10:45～11:15

景教(中国キリスト教)と道教における用語「三一」(三位一体)の比較

「言語学・文献学研究」研究班

報告者：武藤 慎一

「三位一体」と言えば、真っ先にキリスト教が想起されるだろう。もちろん、三一論はキリスト教と非キリスト教を分ける、古代以来の根本的な教義だが、この用語「三一」自体は近代日本の翻訳語ではなく、古代中国にすでに存在していた。もちろん、基本的な数詞の組み合わせなので、それぞれは様々な使われ方がされてきたが、特に「一」は宇宙の根本原理を象徴し、「三」は「四」以上、即ち万物を象徴する。

「三一」は、道教にとっても重要な用語の1つである。したがって、781年に唐の長安に建立された「大秦景教流行中国碑」で、キリスト教の神が「三一」と漢訳された時、東西の2つの宗教が出会っていたのである。本報告では、この2つの宗教の用語「三一」の用法の共通点と相違点を文献学的、歴史的、哲学的観点から考察したい。

◆ 報告3 11:20~11:50
文芸にまつわる「風」について

「東アジアの美学研究」研究班

報告者：秋谷 幸治

晩年の揚雄は、「風（風刺・風教）」の効果が全くないとして、賦（皇帝に献上する美文の一種）を完全に否定している。考えてみるに、「風」字がついた文芸にまつわる術語は非常に多く、『中国美学範疇辞典』に採られている術語を挙げてみると、「風味」「風神」「風韻」「風流」「風骨」「風力」「文風」「風格」「風化」「風教」などがある。では「風」字のついた術語の共通項は一体何であり、「風」とはどのように捉えるべきなのであろうか。これらの術語について分析すると、第一に「形がなく目に見えない」という特徴が、第二に「動きがある」という特徴が認められる。本報告では、この二つの特徴に着目して、「風」にまつわる術語を検討したい。